

七十二年前までの日本は、日清・日露戦争以後も海外に派兵し続け、満州事変から日中事変、太平洋戦争へと国家総力を挙げて戦争に明け暮れた。「日本は神の国」であるという皇国思想の下に、国民は「国民皆兵」の兵役義務を負い、併せて「治安維持法」による思想言論の徹底統制下に、一切服従の外はなかった。治安維持法違反による疑いを怖れ国民は言葉を失った。

しかし或る者は捕縛され、或る者は牢獄に死んだ。自分の命が自分のもので無かった時代である。

油紙に包んで腹に巻き、生残った兵が伝えて、故国に持ち帰った薄い一冊の部隊名簿に「戦死」「不明」の文字がびっしりと並んでいた。何時、何処でどのように何を思っただか、知る人もなく、「不明」の二文字のほか付け加えるべき何物もない若者の死。たった二字の記録の憐れさが今も心を離れない。

昭和十九年十月、比島戦に送られた海上挺進部隊の千百名の隊員の内、十六、十八歳の少年兵百名は、敵艦に当てる肉弾兵器であった。ベニヤボートに乗せられて、爆雷と共に夜の海に放たれた少年の孤独は、如何ばかりであったろうか。

「神の国」に生れた少年、若者らは死ねと命じられ死ぬほかは無く、死んで「護国の神」となり、靖国神社に祀られ、今もまだ「神の国」の序列の中にいる。

敗戦焦土、屍の山から戦後の私達は出発した。血と悲しみを潜り抜け、ようやく命は自分のものとなり、治安維持法から放れ、神国から人間の国に戻ることが出来た。

私達はもう何処へも行かない。自分みずからの命を抱きしめて、自由を大切に平和に生きて行きたい。

地球上にある一万六千発の核弾頭の、現在に対抗できるのは武力ではなく、私達がもつ「憲法九条」でしかない。紛争を武力解決しようとするならば、その先に在るのは何か考える。先に在るのは死に果てた後の平和であろうか。

今こそ世界に向けて「戦わない」と言い続けよう。戦わぬ国々を増やし、誠実に語り、平和な日々を生きよう。私達は「憲法九条」を守り、「共謀罪法」というかつての「治安維持法」の再現を何としても止めよう。